氏名	長　谷　川　康　裕
授与した学位	博　　士
専攻分野の名称	医　　学
学位授与番号	博乙第　4017　号
学位授与の日付	平成１７年３月２５日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 （学位規則第４条第２項該当）
学位論文題目	チャンレー型全人工股関節の長期成績 －手術手技の相違による成績の比較－
論文審査委員	教授　木股　敬裕　教授　大塚　愛二　助教授　伊達　洋至

学位論文内容の要旨

変形性股関節症に対するCharnley 型全人工股関節置換術の術後10年以上経過例の臨床成績，Ｘ線学的成績を調べた．121例135股 を平均13.9年（ 10-23.3年 ）追跡調査した．手術時平均年齢は58歳であった．これらを術式により，ソケット，ステムとも第一世代のもの（Ⅰ群，35股），ソケットは第二世代，ステムは第一世代のもの（Ⅱ群，46股），ソケット，ステムとも第二世代のもの（Ⅲ群，54股）に分けた．135股のJOAスコアは術前平均42.9点が調査時79.5点に改善していた．Ｘ線学的検討では17股のソケットと12股のステムが緩みを呈していた．ソケットの線摩耗量の術後10年時の平均はⅠ群0.11mm/年，Ⅱ群0.08mm/年，Ⅲ群0.07mm/年でⅠ群と他の2群間に有意差を認めた．生存率は人工関節の緩みとソケットの緩みをend pointとしたときにⅠ群と他の2群間に有意差を認めた．術式の変更により，人工関節の緩みの改善を認めた．

論文審査結果の要旨

現在、変形性股関節症に対する治療は、Charnley 型全人工股関節を用いた術式が一般的であるが、この術式も過去に様々な改良が加えられて来た。本研究は、このCharnley 型全人工股関節を用いて施行された術式を詳細に３群に分け、それぞれの術後の臨床成績、Ｘ線学的成績を調査したものである。症例は121例135股に及び、更に10年以上と非常に長期間のＸ線学的変化を詳細に解析し、手術手技の相違による長期成績に与える影響を明らかにした。特に、人工関節の緩み、ソケットの緩みにおいて、術式改良の効果を明らかにした。10年という長期成績を術式の相違により比較した論文はなく、その意味で、価値ある業績と認める。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。